

## ■第40回記念「知の創造研究部会」の報告紹介

日本ナレッジ・マネジメント学会専務理事 知の創造研究部会長 植木英雄

第40回記念研究部会は、電気通信大学の百周年記念館アライアンスホールで初めて参加された数名を含む30名の申込みを得て実施されました。安部特任教授とキャンパスクリエイト社の谷中氏に会場手配等で大変お世話になりまして感謝いたします。

第2部のワークショップでは、スリーエムジャパンの太田部長によるファシリテーションで、ワールドカフェ方式により「2030年のオープンイノベーションとは？」をテーマに未来から見た知の共創を実践しました。

今後も機会があればもっと時間の余裕を取って、フューチャーセッションを行なってみたいと思います。

3Mの使い易いイーゼルパッドを活用して、対話しながら知の共創を行い、最後に成果物を使って共有しました。また、終了後に同会場で懇親会を行い、交流を楽しみました。

(植木英雄部会長)

なお、この感想記事については、田原会員に感想・コメントを寄稿していただきました。

また、ケース・スタディの概要紹介については、横澤准教授から前回の発表と概要を踏まえて第2回目の要点を中心に投稿をしていただきました。本学会の学会誌では、ケース・スタディの投稿を充実していく方針ですが、学術理論的な研究のアプローチは、今後本学会の発展に資すると思います。



(第一部の様子)



(第二部の様子)

◆**第一部 報告横澤公道氏**(横浜国立大学大学院 国際社会科学大学院准教授)  
『ケース・スタディの研究戦略と方法論』〈続〉どのアプローチを選ぶか  
Claser and Strauss(1967), Yin(1984), Eisenhardt(1989)の比較分析

〈報告の要約〉

ケース・スタディと聞くと人によっては、ハーバードビジネスレビューのケースのような MBA の授業で使うような企業の現状や戦略、歴史などを細かく描写したものを思い浮かべるかもしれない。しかし社会学者や経営学者にとってはケース・スタディとは、アンケート等を使った統計調査法と同様に方法論の一つと捉えられることがより多いであろう。統計調査とケース・スタディの大きな違いは、アンケート調査が「なにが、どれくらい」といった質問に対する答えを出すことを得意としている一方で、ケース・スタディはアンケート調査では答えにくい「どうして、なぜ」といった質問に対して答えを出すことができる。またアンケート調査は既存理論から論理的に仮説を導き出し、それを基にアンケートの項目を作り、その仮説を検証するというプロセスを取るが、ケース・スタディは既存理論が当てはまらない新しい分野において経験的データから理論を構築することができるといった大きな違いがある。そういった意味で二つの方法論は相互補完的な関係といえる。



(横澤 公道氏)

第二回の発表となる今回(8月26日)の発表ではデータ収集前の文献の役割の違いや、理論的サンプリングによるケースの選択などについて明らかにしていた。今回の発表では、最後の質疑応答の時間に行かないうちに発表の最中から鋭い質問を多くいただいた。特に質問が多かったのは、定量的サンプリングのロジックとケース・スタディのケースを選ぶ理論的なサンプリングの違い、または単一ケースを扱う場合、こういった条件下で正当化されるかという部分に発表が差し掛かった時であった。また、ケース・スタディから帰納的に理論を構築するアプローチを今回多くの時間を割いたのだが、シリコンバレーで最先端の技術に触れている方から既存文献から仮説を論理的に導き出す演繹的アプローチより、データから仮説を導き出す帰納的に導き出すアプローチのほうがより現実的だというご意見をいただいた。Eisenhardt はシリコンバレーの真ん中に位置するスタンフォード大学の研究者で、そういった環境から帰納的に理論を導き出すアプローチを経営学に取り込んだということを上げたところ非常に納得されていたのが印象的であった。



(質問の様子)

次回の第三回目の発表においては、データ収集と分析を並行して行う継続的比較分析法とデータ収集と分析を分離させる手法の違い、さらには理論的飽和の概念を使ったデータ収集を終わらせる時期、そして研究の質を測るための判断基準の違いなどを説明していく。その後、これらの違いを生じさせた理由、そしてケース・スタディをこれから行っていく研究者は三つのアプローチからどれをどのように選択すべきなのかを明らかにしていく。(以上 横澤公道氏) (写真は編者者松本優)

●編集者 註)横澤先生の講演は第1回が5月27日。第2回が今回報告の8月26日、第3回目が次回12月15日夜からNTT データ豊洲イノベーションセンターで開催予定の第41回「知の創造研究部会」となっています。次回も多くの皆様のご参加よろしく願いいたします。

## ◆第二部 イノベーションワークショップ

スリーエムジャパン株式会社太田光洋氏(カスタマーリレーション本部  
ストラテジック キーアカウントグループ担当部長、イノベーションファシリテーター)

最初に太田光洋氏より『オープンイノベーション推進のためのワークショップ～実践報告と考察～』についてのご講演いただきました。

その後、会場のレイアウト変更をし、全員でオープンイノベーションのトライアル体験を実施していただきました。

●この時の報告と感想を会員の田原裕子さんをお願いしました。



(太田光洋氏)

<報告と感想>

◇「オープンイノベーション推進のためのワークショップ」～フューチャーセッション トライアル体験」

株式会社ベーシック 代表取締役 田原祐子氏(営業戦略・人材育成・組織開発コンサルタント)

スリーエムジャパンでは、自社の技術を46のテクノロジープラットフォームにモジュール化し、自在に“掛け合わせる”ことで、新しい技術を開発している。さらに、これらのモジュールを新たな市場(建築・建設、コンシューマー・オフィス、ディスプレイ、電子部品、フィルター、ヘルスケア etc)と組み合わせることで、機会の創出による開発と活用を促進しているようだ。こうした、いくつかの知の創造・共創手法を、神奈川県相模原市にある自社のカスタマーテクニカルセンター(CTC)において、見学者(クライアント)が実際に様々なクリエイションやソリューションを体感できるワークショップを実施している。



(田原祐子氏)

今回の部会では、3Mのカスタマーリレーション本部の太田部長がファシリテーターとなり、参加者全員で「オープンイノベーション推進のためのワークショップ」を実施した。

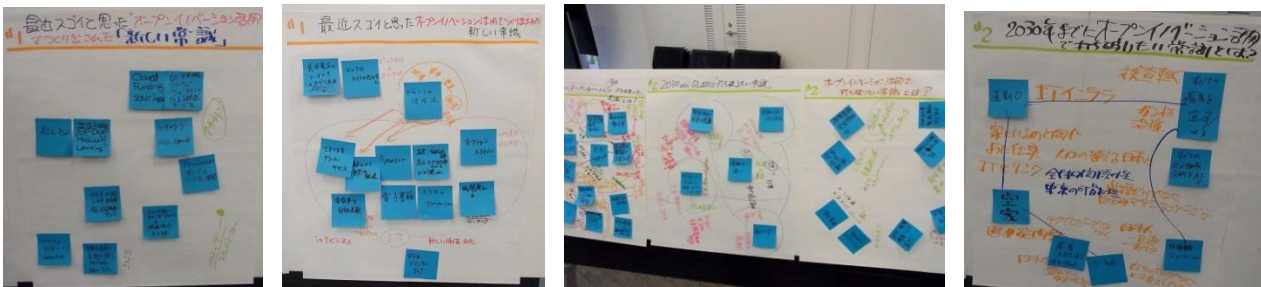
テーマは、『2030年のオープンイノベーション』である。まずは、ポストイットに、参加者各自が感じる「オープンイノベーション活用でつくり出された新しい常識」「2030年までにオープンイノベーション活用で打ち破りたい常識」を書き、ポストイットで自分と類似した価値観を持つ人たちを見つけ、グループになる。(マグネットテーブル)これを、因数分解しながら、ワールドカフェ方式で全員がテーブルを移って行き、対話を重ねていく。対話とは、議論(考え方をぶつけあいながら答えを出していく)や会話(楽しむための言葉のやりとり)とは異なり、「特定のトピックに関して、お互いの意見の違いを理解し合い、質問によって相手の知を引き出すこと」である。

こうした対話&ワールドカフェを1時間ばかり繰り返し、最終的なアウトプットは、3Mのイーゼルパッドを使って、未来編集会議(プロトタイピング)である。これは、当初各チームがテーマに選んだ、「2030年のオープンイノベーションが実現した」と仮定して、その成功を特集した未来新聞の一面を作成していくというものである。「各グループが掲げたテーマが、もし未来に実現したら、朝刊を広げてみたらこんな記事が掲載されるだろう」という想定のものに、新聞編集者さながらに、グループ全員で、イーゼルパッドに、未来を想定した見出しや記事を書き込みしていく。最後には、各グループが作成した未来新聞を、全員が歩き回って、内容を確認していく。(ギャラリーウオーク)

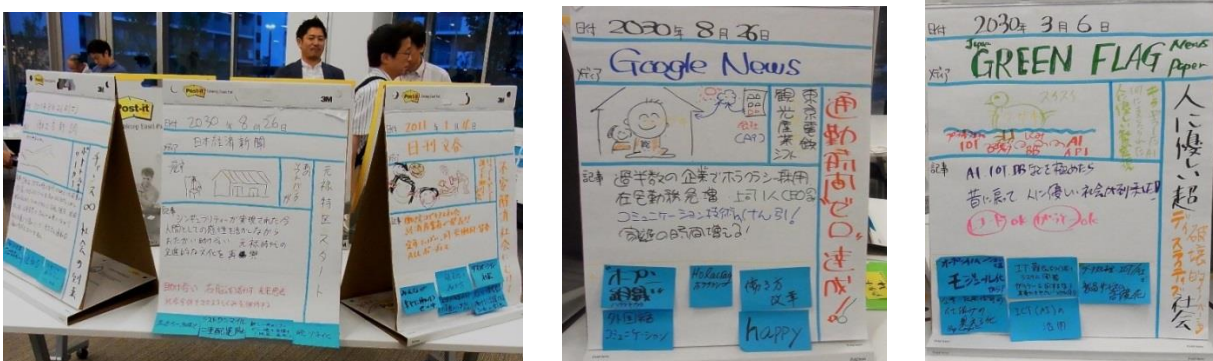
以上、今回は、3M社の知の創造・共創の一部の手法を垣間見ることができるような、とても興味深いワークショップであったため、ワークショップの内容や流れをご紹介したが、個人的には、「新しい発明・発見・創造は、モジュール化したナレッジを組み合わせることで、無限に創出できる」という持論を持っているため、これと3Mでオープンイノベーションのために実践されているさまざまな手法や、今回のワークショップのベースとなる理論とも合致し、非常に楽しく参加させていただいた。(以上 田原裕子氏)



(5人ずつ(4人のところも)1チームになりだされたテーマに対して対話やまとめの作業をします)



(各自ポストイットに書いてグループでまとめたのを貼り全員で見回り、似た意見の人でグループ再結成、対話、未来新聞を作る)



(出来あがった未来新聞を皆で見確認、評価 後でお気に入り投票)

## ◆情報交換・懇親会



(乾杯)



(久米理事長の挨拶)



最後に、懇親会まで付き合っていた全員で記念写真を撮った。(シャッター： 荒木聖史 幹事 )



●ご参加の皆様、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

(以上の報告全体のレイアウト、写真、キャプション、●以下の補足的文章等は編集者松本優の責任です。 ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。)